平成19年度 富里歴史講座

第1回「富里の中世」

於：富里市立図書館

２００７・５・２６

～ 水田を耕す武士たち ～

林 田 利 之

１．「中世」と呼ばれる時代とは

鎌倉時代になると、歴史の表舞台に武士たちが登場し、時代の担い手になります。彼らは、平安時代の末頃から自分たちの所領の中心に「館」を築き、「谷津」と呼ばれる谷間を水田として開墾し、周辺の山野を取り込みながら自分の所領を増やしてゆきました。

彼らはその所領を「一所懸命」に守りながら次第にその勢力を拡大し、さらに多くの武士たちは、時の権門（当時の権力者）を後ろ盾として勢力基盤を固めました。この動きが具体化したものが「荘園」と呼ばれるものです。印旛地方では白井荘、印東荘、遠山方御厨などが知られています。

所領を増やすための戦乱が各地で起こり始めると、武士の中には権力を握る者、没落する者と様々な立場の者が現れ始めました。印旛では権力を握る者の代表として「千葉六党」と呼ばれる千葉氏・大須賀氏が挙げられ、没落した者としては、千葉一族でもある原氏、伊豆・相模から進出してきた後北条氏を挙げることができます。

また、中世という時代は民衆が独自の活躍をみせる一面も持っており、多くの文献資料などにその姿が残されています。

図１　千葉県内の荘園

２．印旛と千葉氏

千葉の県名の起こりでもある「千葉氏」と印旛の関係は密接です。千葉氏とのその一族は、下総国に強大な勢力を誇り、特に鎌倉時代以降は下総国の守護を命じられ、戦国時代の終わりに滅亡するまで下総地方で活躍をしていました。

千葉氏は北極星・北斗七星が神格化した妙見尊を信仰の対象にしていますが、伝承では、千葉氏の祖である平良文が上野国染谷川の合戦において窮地に陥った際、妙見尊が現れて救われたことから妙見信仰が始まったとされています。

千葉氏の本拠地は現在の酒々井町と佐倉市の境界に位置した、本佐倉城でした。城の周辺には「根古屋」と呼ばれる家臣の居住地や千葉氏に外護された寺社が並び、

さらに、周辺の要所には小規模な城を配置して守りを固めていました。戦国時代の後半には、相模国小田原を本拠地とする北条氏が房総半島に勢力を延ばして来ますが、対する千葉氏は一族の内紛などに見舞われ、前時代の力を次第に失いつつある時期でした。この時期の千葉氏の書状が残されていますが、宛て先や内容を見る限り、現在の佐倉から東の地域に関するものに限られており、前時代に比較して印旛地方に対する影響力が低下していることがわかります。戦国時代の末には、千葉氏は北条氏の勢力下に入りますが、豊臣秀吉によって滅亡させられてしまいました。

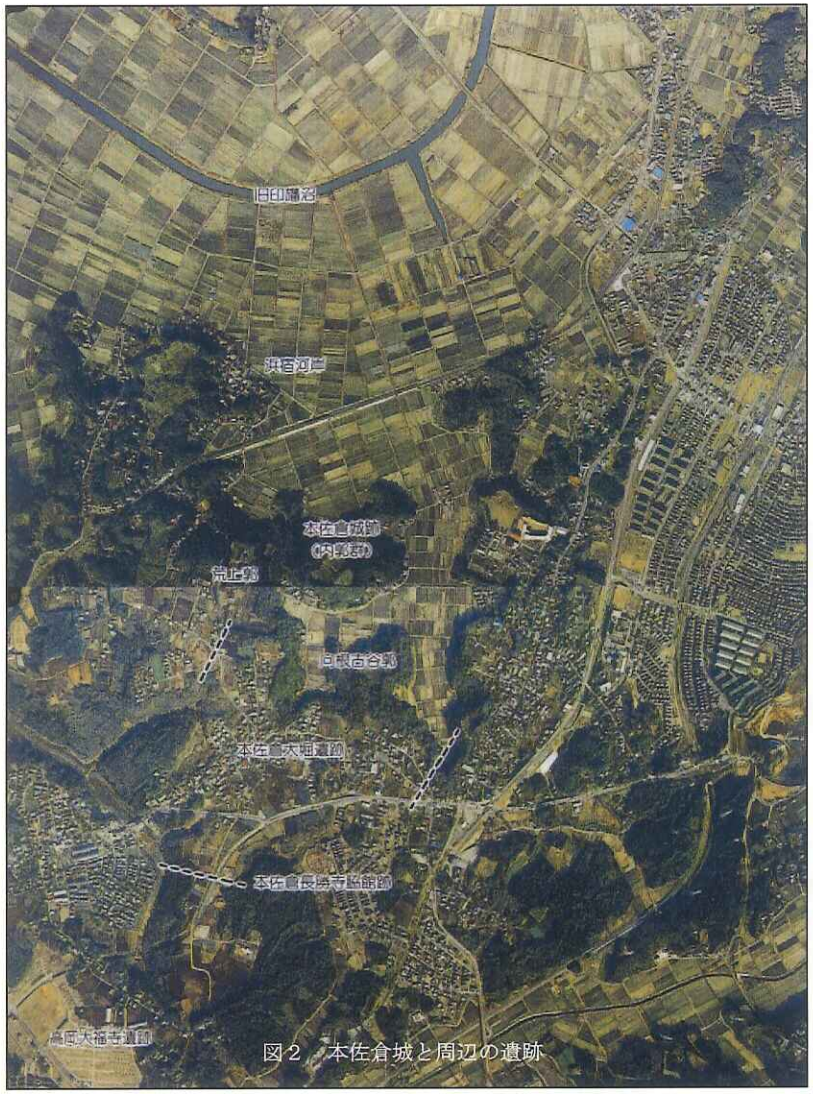

図２　本佐倉城と周辺の遺跡